

令和元年6月18日現在

機関番号：14602  
 研究種目：基盤研究(C)（一般）  
 研究期間：2015～2018  
 課題番号：15K04028  
 研究課題名（和文）インターネット利用行動の規定因に関する研究：ネット上の他者との関係に着目して

研究課題名（英文）Study on the determinants for Internet use: the relation with others on Internet

研究代表者  
 中山 満子（NAKAYAMA, Michiko）  
 奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：30235692  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：高校生から成人の多様な世代を対象として、ネット利用と自他の関係の認識の関連を検討した。

高校生では、友人関係のとり方がSNS利用とその結果としてのネガティブ経験に影響することが示された。若年成人層対象の調査では多様なSNS利用がオンライン社会関係資本やつながりの感覚を醸成すること、LINE利用の多寡は影響しないことが示された。幼い子どもを育児中の母親が育児情報を探索する行動には、社会的比較傾向、自己確認傾向が調整変数として働くことが示された。また大学生である子どもに対して、母親が行うモニタリング行動には、自己愛や親子関係認知が影響することが示された。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、友人関係の取り方、社会的比較や自己確認動機、自己愛や内的作業モデルなどの心理学的要因と多様なネット利用行動（SNS、情報検索、モニタリング）との関係を明らかにしたことがあげられる。社会的意義としては、特に高校生対象の調査において、現代的な友人関係とされる傷つけあうことを回避し快活な関係を志向する群でSNSによるネガティブ経験が多く、適応的な群（内面関係群）ではLINEの利用時間は長くてもネガティブ経験は少ないことが示されるなど、SNS利用の多寡そのものではなく背後にある対人関係に着目することの必要性が示された。

研究成果の概要（英文）：The relations between the Internet use and some psychological factors were investigated, targeted for the various generations. It was indicated that friendship-style of high school students influences their SNS use and negative experience with SNS. The investigation of a young adult showed that various SNS use brewed the On-line social capital and the sense of connection. It was also indicated that the tendency of social comparison or self-verifying moderated the relation between anxiety and information-seeking behavior of which the mother rearing a young child. Moreover, it was suggested that narcissism and the parent-child relationship recognition of mothers influenced their monitoring behavior to the children who are late adolescence.

研究分野：社会心理学

キーワード：インターネット 対人関係 社会的比較 自己確認 自己愛 親子関係 友人関係 SNS

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

今日、インターネットや SNS は我々の生活にとって欠かせないものとなっており、人間の行動に大きな影響を及ぼしている。携帯・スマホ、タブレットといった機器を手放せず、対面で友人と一緒にいるときでも他者と LINE でコミュニケーションする、自分の愚行を Twitter で発信するなど、なぜそのような行動をとるのか、容易には説明がつかない現象が起きている。これらのことについては社会学的観点からの議論や論評はあるが、心理学的な研究はあまり行われていない。本研究にあたっては、ネット利用には、『自己評価』『他者との比較』といった社会心理学的な基礎過程が深く関わっており、社会的比較やその動機となる自己評価、自己確認、自己と他者に対する期待や信念などの概念を用いてネット利用行動を分析・検討することが有用であると考え、ネット上の「他者」の意味について実証的に研究することとした。

これまで社会的相互作用の研究や社会的比較の研究で想定された「他者」は、自分に近く類似した存在であることが多く、不特定で見知らぬ人々を「他者」と位置付けることは少ない。しかしネットの普及は「他者」の範囲を拡大した。本研究では「他者」の意味が拡大し変化している現代のネット利用行動を分析する。

またネット利用については、デジタルネイティブといった「世代論」で議論されることが多い。しかし本研究では、若者の利用の特徴、成人期の利用の特徴を単なる世代論ではなく、人間の生涯発達の観点から考察する。そして『自己と他者』『個と関係性』といった基礎概念に立ち返って、今日のネット利用について解き明かすことも目的とする。

### 2. 研究の目的

本研究では、生涯発達の視点を持ち、ネット利用行動を他者との関係性という観点から検討することを第 1 の目的とする。そのため、高校生、大学生、20~30 代の若年成人層、乳幼児を持つ母親、そして大学生の子をもつ母親を研究対象として、それぞれのネット利用行動とライフサイクル上の特徴とを関連付けて考察する。また自他の関係のとらえ方として、愛着、自己愛、自己確認動機、社会的比較をとりあげて、ネット利用行動との関係を検討することを第 2 の目的とする。さらに、ネット利用の帰結として、社会関係資本、つながり感覚の醸成について検討することを第 3 の目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 高校生の友人関係と SNS 利用に伴うネガティブ経験

高校生の友人関係のあり方と SNS 利用及び SNS 利用から生じるネガティブ経験の関連を検討することを目的とし、公立高校の一年生を対象に質問紙調査を実施した。最終的に 175 名(男子 41 名、女子 134 名)を分析対象とした。

質問項目は、友人関係尺度(岡田, 2007)、SNS 利用実態、SNS 利用によるネガティブ経験(SNS ストレス尺度, 岡本, 2017)であった。友人関係を類型化し、友人関係のあり方が SNS 利用(LINE、Twitter、Facebook、Instagram)とそれに伴うネガティブ経験(以下、SNS ネガティブ経験)に及ぼす影響について分析を行った。

#### (2) つながり尺度の構築と SNS 利用の帰結としてのつながり感覚

大学生を対象とした予備調査と文献研究からネット利用による「つながり感覚」尺度を作成した。この尺度は、ネット利用によって醸成されるつながりの感覚を測るもので、『関係への信頼感』『気持ちの共有』『場の共有』の 3 因子が想定される。『関係への信頼感』は、「自分を友人(知人)だと思ってくれる人がたくさんいると思う」「私のことを想ってくれる人がいる」など、『気持ちの共有』は、「自分と異なる意見を知ることができる」「私と同じ感じ方をしている人がある」など、『場の共有』は「誰かが自分のそばにいてくれるような気分になれる」「つきあいのある人が、すぐ近くにいるような気分になることがある」などの項目からなる。全体として、社会関係資本に重なるところにある概念であるが、社会関係資本では信頼感・互酬性の規範が中心であるのに対して、より情緒的な側面に焦点づけられているところが特徴である。本研究では、作成したつながり感覚尺度とオンライン社会関係資本尺度(以下、オンライン SC)を用いて、SNS 利用が何を生み出しているのか、どのような意味を持つのかについて検討する。加えて、「一般的他者への内的作業モデル」を援用し、自他の関係性認知が SNS 利用とオンライン SC・つながり感覚との関係のあり方に影響するかどうかを検討する。

大学生を対象とした先行研究が多いが、今日の日本では、Facebook や Instagram などの SNS を盛んに利用しているのは 20 代から 30 代の若年成人層である。またこの年代は学生時代に比べて対人関係の幅が相対的に広いことも特徴であり、これを踏まえて、本研究では 20 代~30 代を対象とした Web 調査を実施し、231 名(男性 97 名、女性 134 名)を分析対象とした。

#### (3) 育児期女性のネット利用行動

乳幼児を育児中の母親は、人とのリアルなつながりが持ちにくい中、育児不安を背景に、育児に関する情報を得たいという欲求が強いと考えられる。ここでは、このような時期にある母親たちの育児不安とネット上での育児情報への接触について検討するために 2 つの調査研究を行った(自他の比較しやすさである社会的比較傾向の影響の検討、「自分の考えや感じ方が正しいことを確認したい」といういわゆる自己確認動機の影響について検討)では、Web

調査により育児期の女性 300 名を、<sup>1)</sup>では Web 調査と保育園で実施した質問紙調査によって、育児期女性 479 名を分析対象とした。

の主な質問項目は、育児感情（不安感、充実感、負担感）育児情報接触の程度、情報接触後の感情、社会的比較傾向であった。<sup>2)</sup>では、育児不安、情報接触程度、情報接触後の育児不安、自己確証動機であった。

#### (4) ネット上の他者が態度変容へ与える影響

自己確証動機に着目して、何らかのトピックスについての態度を決定しなければならない局面で、人がどのようにインターネットを利用して情報を探し、その結果どのように影響されるのかについて、子宮頸がんワクチン接種、早期英語教育という 2 つのトピックスを用いて、実験的に検討した。

は 22 名の大学生が参加した。まず子宮頸がんワクチン接種への態度（賛否を 6 段階）を問い、その後 30 分間、PC で google を用いて自由に Web ページを検索・閲覧し、閲覧したページを、「自分の意見に一致/不一致」×「重要/どちらとも言えない/重要でない」の 6 つのいずれかに分類してブックマークフォルダに保存した。検索後に再び態度を尋ねた。また参加者の同意をとって画面をビデオ録画し、閲覧時間を求めた。

は 34 名の大学生が参加した。あらかじめ早期英語教育に対して、反対、賛成、中立の立場にある Web ページを選定し（反対 9、賛成 9、中立 2）Excel を用いて賛成あるいは反対意見へリンクを貼った。シートは賛成と反対の 2 種類であった（例：反対シートには反対意見のページ 9 つと中立 1 つへリンクが貼られている）。参加者はページを閲覧し、と同様のページを分類した。この手続きにより、自分の意見に沿った選択の情報接触が行われるかどうかを検証した。

#### (5) 母親による見守り行動 青年期の子どもをもつ母親の検討

本研究ではネットを利用して他者（特に親密な他者）の動向を「知りたい心」について検討する。ここでは、青年期の子どもを持つ母親に着目する。子どもが幼いときには親が子を見守るという関係はごく自然である。しかし、近年、子どもが青年期になっても、親が常に子どもを見守り（あるいは監視し）介入するという親子関係（いわゆるヘリコプターペアレンツ）が存在すると言われる。本研究では、ネットや SNS を利用して青年期の子どもを見守る母親に着目し、見守り・監視行動の規定因として、母親からみた親子関係（以下、親子関係認知）と母親の自己愛を設定して検討した。

母親の認知する親子関係について問うために、心理的離乳尺度（落合・佐藤，1996）を親が回答する文章に改定した尺度、母親の自己愛を測定する自己愛人格目録短縮版（NPI-S）（小塩，1999）、モニタリング行動としては、「メールや LINE で、子どもの居場所を聞く」「子どもの SNS（Twitter、Instagram など）を見ることで、子どもの行動を知る」「スマホの GPS 機能・GPS アプリ（友達を探す・LIFE360 など）で、子どもの居場所を確認する」などの 9 項目を尋ねた。

## 4. 研究の成果

### (1) 高校生の友人関係と SNS 利用に伴うネガティブ経験

友人関係については、クラスター分析の結果、先行研究と類似の 3 類型、すなわち関係回避群、気づかい・群れ群、内面関係群を得た。SNS ネガティブ経験は、SNS ストレス尺度から 7 因子を採用して尺度構成を行った。友人関係の類型を独立変数とし、SNS ネガティブ経験を従属変数とした分散分析を行った結果、総合得点、閲覧強迫、情報拡散不安、社会的比較において、気づかい・群れ群が内面関係群に比較して SNS ネガティブ経験が多いことが示された。一方、SNS 利用実態との関連では、気づかい・群れ群が他の

表 1 友人関係の類型と SNS ネガティブ経験

	1.関係回避群 (n=55)	2.気づかい・群れ群 (n=86)	3.内面関係群 (n=32)	F
<b>SNSネガティブ経験</b>				
総得点	57.71	63.43	54.38	3.17 * 3<2
閲覧強迫	2.04	2.26	1.88	3.43 * 3<2
情報拡散不安	2.20	2.54	2.06	4.00 * 3<2
友だち申請	2.16	2.22	2.00	n. s.
社会的比較	1.92	2.16	1.73	3.21 * 3<2
過剰なつながり	2.07	2.16	1.83	n. s.
ギャップ	2.15	2.41	2.34	n. s.
背伸び	1.79	1.85	1.52	n. s.
LINE利用時間	1.69	1.72	2.91	3.50 * 1,2<3

\* $p < .05$

注：「ギャップ」は「SNSと現実のギャップ」

2 群に比べて LINE の利用時間が長いことが示された（表 1）

気づかい・群れ群は、しばしば現代青年の特徴として注目される友人関係のあり方であり、

このタイプは自己愛傾向が強く、自他の比較あるいは他者からの評価によって自己肯定感を高めると言われる。このような友人関係のとり方をする高校生にとって SNS は、自他を比較し、他者からの評価を直接的に表示する装置であるので、SNS 利用によってネガティブな感情が生じるという影響が強くみられる。一方で内面関係群はいわゆる従来型といわれる適応的な群であるが、この群では、LINE を長時間利用していてもネガティブ経験にはつながらないことが示された。中高生の SNS 利用についてはしばしば問題になるが、SNS 利用の多寡それ自体ではなく、背後にある友人関係が適応的であるかどうかの方が重要であることを示唆している。なお、本研究の成果は、「科学・技術研究」誌に掲載された。

(2) つながり尺度の構築と SNS 利用の帰結としてのつながり感覚

LINE、Twitter、Instagram、Facebook のそれぞれについて、SNS 利用（利用時間とつながり数）を独立変数、オンライン SC とつながり感覚の下位尺度得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行った。

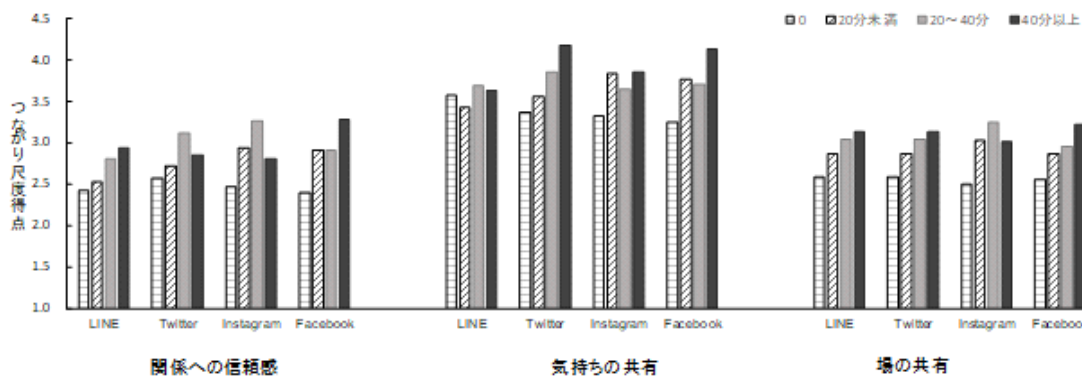


図1 利用時間とつながり感覚

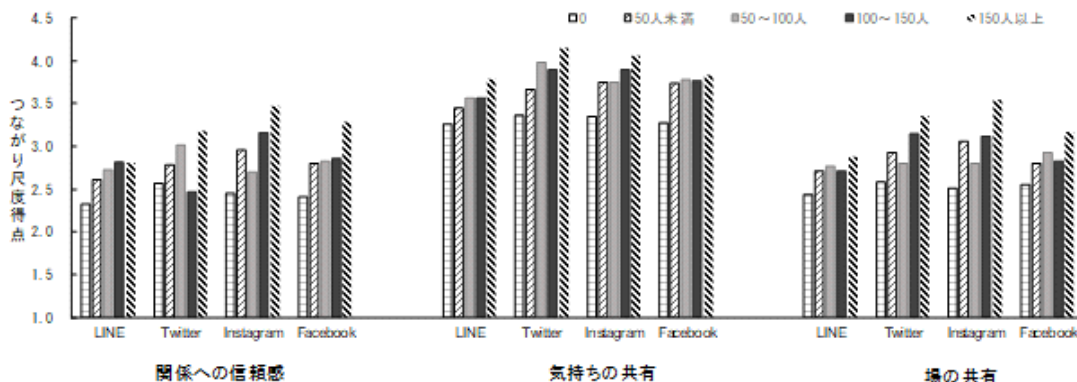


図2 つながり数とつながり感覚

図1、図2には、「つながり感覚」の結果を示す。つながり感覚の中では、他者の様々な意見や考えを知ることや、感動や感情を共有することを指す「気持ちの共有」得点が全体に高く、LINE 以外の3つのSNSでは、利用時間が長い方が気持ちの共有得点が高いことが示された。他方、LINE を長時間利用していても、気持ちの共有感覚を高めるといった効果はない。誰かがそばにいてくれるような気がするなどの「場の共有」得点も、LINE 以外の3つのSNSでは利用時間の影響がみられたが、LINE では傾向にとどまった。一方、ネット上に友人がたくさんいると思う、自分を理解してくれる人がいると思うなどの「関係への信頼感」は、Twitter 以外の3つのSNSで利用時間の影響がみられた(図1)。つながり数を独立変数とした分析においても、LINE の友だち数の多さはつながり感覚に影響しないことが示された。他のSNSでは、必ずしも友だちが多いほどつながり感覚が多いという一貫した傾向が示されていないが、利用していない人(つながりがゼロの人)とつながり数が多い人の差は有意であった(図2)。

また社会関係資本については、Twitter が橋渡し型社会関係資本を、Instagram と Facebook は橋渡し型・結束型の双方の社会関係資本を形成することが示された。LINE 利用(時間・友達数)は社会関係資本の形成にはつながらないことも示された。本研究の成果は、「知覚 身体的リアリティの諸相」(ユニオンプレス)の中の一章「SNS 利用が醸成するつながりの感覚」として発表された。

さらに、自他の関係性の認識である「一般的他者に対する内的作業モデル」と SNS 利用の関係についても検討した。内的作業モデルは、先行研究にならい、「見捨てられ不安」「親密性回避」の2得点とし、そのうえでクラスター分析を行って類型化を試みた。その結果、2得点と

も平均よりも低く、特に見捨てられ不安の低い「見捨てられ不安低群」、2得点ともに平均よりも高く、特に親密性回避の高い「親密性回避高群」の2群を採用した。2群でSNS利用、オンラインSC、つながり感覚を比較したところ、全体として大きな差はみられなかった。次に、群ごとにSNS利用とオンラインSC・つながり感覚の相関(順序相関)を算出したところ、傾向に違いがみられた。不安低群では、LINE利用・LINEの友だち数は、オンラインSC・つながり感覚と関係がなく、他のSNS利用時間とつながり数との間には正の関係がみられた。すなわち、LINEを除き、長時間利用してつながりも多い場合に、社会関係資本やつながり感覚が高くなることが示された。一方、親密性回避高群では、LINEの利用時間とつながり感覚と正の関係にあり、Twitterの利用時間、フォロワー数はオンラインSC・つながり感覚に関連を持たないという特徴的な結果が得られた。Twitter利用によって橋渡し型SCやつながり感覚がもたらされるのは親密性回避が低い場合に限られる可能性が示唆される。また親密性回避が高い時にはLINEを利用することでつながり感覚が高まる。一般的他者への親密性回避が高い場合でも、特定の人とのつながり感覚が生み出されていることが示唆される。

### (3) 育児期女性のネット利用行動

の結果、育児不安、育児不安×社会的比較傾向がWebサイトでの育児情報接触程度を予測した。すなわち育児不安が高まると育児情報接触が強まるが、社会的比較を行う傾向が強い場合に、育児不安から育児情報接触への影響がより強いことが示された。またWebでの情報接触後には、情報接触の程度、能力比較傾向、情報接触×能力比較傾向が育児感情(不安、安心感)を予測することが示された。すなわち能力比較傾向が高い場合には、情報接触程度の影響を受けず、不安・安心感ともに高いのに対して、能力比較傾向が低い場合に情報接触程度の影響を強く受けることが示された。この成果は、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会で発表された。

の結果、育児不安、自己確証動機は、有意に情報接触の程度を予測することが明らかになった。また情報接触後は、情報接触の程度、自己確証動機、情報接触×自己確証動機が、有意に情報接触後の育児不安を予測することが明らかとなり、自己確証動機が高い場合には、情報接触程度に関わらず育児不安が高いのに対して、自己確証動機が低い場合には接触頻度の影響が大きかった。ネット上で育児情報を頻繁に調べると、その後さらに不安になる。また、自分の考えや感じ方が正しいことを確認したいという自己確証動機が強い場合には、それほど情報接触の頻度が高くなくても、情報を得たのちに不安が強まることを示唆している。いずれの結果も決定係数が低いという問題があり、他の変数も投入して検討する必要がある。また今回は、自己確証動機が不安に影響するという方向で分析したが、不安が自己確証動機を高める可能性もあり、今後の検討課題である。この成果は、関西心理学会第130回大会(2018)で発表された。

### (4) ネット上の他者が態度変容へ与える影響

では、「おおいに賛成」～「どちらかといえば賛成」を『賛成』、「おおいに反対」～「どちらかといえば反対」を『反対』としたとき、22名中8名の参加者(36.4%)が『賛成』から『反対』へ態度を変えた。態度変容した群では、自分の意見と不一致なページ(反証情報)を時間をかけて閲覧し重要と判定していた。態度変容をしなかった群では、自分の主張と一致しているページを多く閲覧して重視した一方、一致しないページは重視せず、閲覧自体も少ない確認バイアス傾向がみられた。実験の結果、必ずしも確証的バイアス傾向がみられたわけではなく、個人差にも着目する必要があると考えられる。なお本研究の結果は、電子情報通信学会ヒューマン情報処理基礎研究会で発表された。

においても、選択的情報接触、確認バイアス傾向は必ずしも示されず、実験課題や手続き、トピックの再検討をするとともに、仮説の見直しも今後の課題である。

### (5) 母親による見守り行動 青年期の子どもをもつ母親の検討

Web調査を実施し、18歳～22歳の子どもを持つ母親384名を分析対象とした。自己愛については、原典通り、優越感・有能感、注目称賛欲求、自己主張性の3得点とし、これを主成分分析して第1主成分「自己愛総合」、第2主成分「注目称賛 主張」を算出して分析に用いた。親子関係の認知については、探索的因子分析の結果、3因子(依存、自立尊重、無関心)を採用した。モニタリング行動については、探索的因子分析の結果、2因子(メールLINEによる明示的連絡・確認、SNSによるモニタリング)を採用した。

親子関係認知、自己愛からモニタリング行動を予測する重回帰分析を行った結果、明示的連絡・確認には親子関係の「依存」が、SNSによるモニタリングには自己愛総合が影響を与えることが示された。

### (6) まとめ

成果のまとめと今後の課題は以下のとおりである。

高校生についてはSNSとの関係でもっとも重要な要因と考えられる友人関係のあり方に焦点づけて研究を行った。その結果、友人関係の類型の中で現代的とされる「気づかい・群れ群」において、SNSによるネガティブ経験が多いことが示された。SNS利用の多寡それ自体よりも

アルな友人関係のあり方が重要と考えられる。

20代から30代の若年成人層は、SNS利用が盛んな時期であり、社会の中でのつながりや社会関係資本を形成する時期でもあると考えられる。この時期に、どのようなSNS利用が何を生み出すのかを検討したところ、LINE以外のSNS利用が気持ちの共有や場の共有といったつながり感覚を強めること、LINE利用の多寡はつながりや社会関係資本に影響を及ぼさないこと、Twitterは橋渡し型社会関係資本の醸成につながり、広くつながりを形成する働きをしていること、FacebookやInstagramはむしろ結束型社会関係資本を高め、強い紐帯をより強める働きをしていることが示唆された。

幼い子どもを育児中の母親の情報接触行動には、社会的比較傾向、自己確認傾向が調整変数として働くことも示された。社会的比較を行う傾向が強い場合に育児不安から育児情報接触への影響がより強いこと、接触後の不安への影響は、自己確認動機が低い場合には接触頻度の影響が大きいことが、自己確認動機が高い場合には、情報接触程度に関わらず育児不安が高いことが示され、他者と比較したり、自分の正しさを確認したいという気持ちが、情報接触行動と不安との関連のあり方に影響することが明らかになった。自己確認動機については大学生を対象として実験的に情報探索行動との関係を検討したが、自己確認的な行動をする場合とそうではない場合という個人差があるという結果であった。何らかの意思決定をしなければならない場面では、必ずしも自己確認的な情報探索行動は行われないうのである。今後は仮説設定を見直すとともに、実験手続きや課題を見直して再検討する予定である。

大学生である子どもに対して、母親が行うモニタリング行動（LINEやメールを介して居場所や行動を確認したり、子どものSNSを見て様子を知るなどの行動）についても検討した。LINE等で明示的に連絡を取る行動には子どもへの依存傾向が、明示的ではなくこっそりとSNSで様子をうかがう行動には自己愛の高さが影響することが示唆された。今回の研究では、いずれも決定係数が低かったが、自尊感情の制御機能である自己愛や研究(2)で示した自他の関係性の認識である内的作業モデルなどが、SNS利用やSNSを介したモニタリング行動に及ぼす影響について、今後さらに検討を重ね明らかにしていくことが今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

中山満子(2018)高校生の友人関係とSNS利用に伴うネガティブ経験. 科学・技術研究, 7(2) 127-132. (査読付)

〔学会発表〕(計3件)

松井咲子・中山満子(2018)インターネットによる育児情報接触が育児期の女性の感情に与える影響. 電子情報通信学会信学技報 HCS2017-81, 85-90.

中山満子・石田希実(2018)インターネット上での情報探索による態度変容 我々はどのように情報の影響を受けるのか. 電子情報通信学会信学技報 HCS2017-81, 91-94.

中山満子・松井咲子(2018)母親の育児不安とネット上の情報接触 自己確認動機に着目して. 関西心理学会第130回大会

〔図書〕(計1件)

中山満子(2019) SNS利用が醸成するつながりの感覚. 太城敬良他(編著) 知覚 身体的リアリティの諸相: 感覚間統合から社会的ネットワークまで (pp.216-235) ユニオンプレス

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

該当なし

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

該当なし

(2)研究協力者

該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。